

箴言14章12節 「まっすぐに見える道」

1A 「道」というもの

2A 正しく生きようとする者の「行き止まり」

3A イエスを信じる道

本文

箴言 14 章 12 節を開いてください、私たちの聖書通読の学びは箴言 11 章まで来ていました。今日の午後に、12 章から 15 章まで読むことができたらと思います。今朝は、14 章 12 節に注目します。「**人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。**」

1A 「道」というもの

箴言には、「道」という言葉が実に 66 回も出てきます。それだけ、神は私たちが正しい道の中に歩んでほしいと願われています。箴言また聖書全体には、二つの道を教えています。それは、「命に至る道」と「死に至る道」です。ここ 14 章 12 節は、死に至る道について書いてありますが、命に至る道は、箴言 12 章 28 節にあります。「正義の道にはいのちがある。その道筋には死がない。」そして、新約聖書にはローマ人への手紙 6 章において、永遠の命に至る道と死に至る罪の道を教えています。「20-22 節 罪の奴隸であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隸となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」

「道」というもので大事なのは、その道路の状態もさることながら、最も大事なのは目標地点です。その方向が正しいからこそ、道の役目を果たします。ですから私たちは、自分がどちらの終着点に至るか、その方向を確かめていないといけません。しばしば私たちは、誠実に生きていれば良いところに生けると信じています。「あの人は、とてもまじめで、誠実にやっているんだから。」という言葉をしばしば聞きます。それは、誠実であることがその人を正しくするという考えに基づいています。

しかし、誠実に一生懸命、反対方向の道を歩いて、あるいは走ったとしましょう。誠実であればあるほど、本来、到着すべき地点から遠く離れてしまうのです。ある牧師さんが実際に起こった、あるフットボールの試合のことを話してくれました。雪風吹になつたそうです。自分の応援しているチームがボールをもってゴールに入ってきた！と思いつつ、なんと反対側に入ってしまった、つまり相手のために点を入れてしまいました。誠実というだけでは、正しさを保証しないのです。十二世紀に生きていたフランスの神学者が、こう言いました。「地獄は善い意図や願いで満ちている。」善意でやったことが、実は地獄に至らしめることが非常に多い、という意味です。

私たちは時に、自分の正しさを主張します。自分がいかに正しいかを認めてもらおうと必死になります。けれども思い出さなければいけないのは、「正しい、というのは正しくない」ということです。自分の正しさを主張すればするほど、神の正しさ、神の義から離れてしまうのです。箴言にも書いてあります。「12:15 愚か者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のある者は忠告を聞き入れる。」そして、正しいと思っているけれども、本当に正しいのか疑う必要があります。「21:2 人は自分の道はみな正しいと思う。しかし主は人の心の値うちをはかられる。」正しいと思っているその心は、いつの間にかさまざまな悪に染められています。それでも、自分は正しいと思いこんでいます。これが自己義認の恐ろしさです。ですから、いつも自分の歩いている道に心を配り、正しい所を果たして歩いているのかどうか、確かめるのです。「4:26 あなたの足の道筋に心を配り、あなたのすべての道を堅く定めよ。」

人が、「自分は正しい」と思ってやっていることには、さまざまな悲惨があります。迫害している人々というのは、必ず自分が正しいと思っています。「ヨハネ 16:2 事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。」そして、自分たちがそれぞれ、自分の正しさだけで生きると、混乱と混沌が起こります。士師の時代がそうでした。「21:25 そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」世界で起こっていること、社会で起こっていること、いや自分の周りでさえ、自分の目に正しいと思われる事を追及しているため、ばらばらになっているのです。それから、人が意気投合したらよくなるでしょうか？いいえ、「いっしょにやっていこう」とすると、バベルの塔を作ってしまいます。「創世 11:4 さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。」あるいは、一つになる時、国々が神とキリストに逆らうということが、詩篇二篇に書かれています。

ではどうすればよいのでしょうか？神が正しいとされる人はどのような人なのでしょうか？「主なる神よ、あなただけが正しい方です。」とすることです。神のみが義であることを、主の前でひれ伏して、憐れみを請うのです。その者がかえって正しいと認められるのです。パリサイ人の独善的な祈りが一方にあり、そして取税人の祈りが他方にありました。私は罪人です、憐れんでくださいという祈りこそが、神の前で義と認められました。また、ダニエルが、自分の民のため、エルサレムのために祈った時も、彼は神が正しい方であることを、ずっと認めていました。「ダニエル 9:7 主よ。正義はあなたのものですが、不面目は私たちのもので、今日あるとおり、ユダの人々、エルサレムの住民のもの、また、あなたが追い散らされたあらゆる国々で、近く、あるいは遠くにいるすべてのイスラエル人のものです。これは、彼らがあなたに逆らった不信の罪のためです。」神だけが、正しい方なのです。

2A 正しく生きようとする者の「行き止まり」

ところで、正しく生きようとした人々の筆頭が、パリサイ派の人々です。彼らは律法の一点一画も失うことなく、それをいかに守るべきか、先祖の伝承に基づく解釈をして守っていこうとした人々でした。ところが、イエス様はこう言わわれたのです。「マタイ 5:20 まことに、あなたがたに告げます。も

「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいられません。」そして、殺してはならないという戒めについては、兄弟を馬鹿という人が最後の審判で裁かれることになるとイエス様は言われました。殺す動機である、人への敵意、憎しみ、呪いまでもその戒めに含まれるのです。同じように、姦淫してはならないということも、女を、情欲をもって見たら、火と硫黄の池に投げ込まれるとイエス様は言われました。そして、イエス様は、「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」

こんなことを聞いたら、自分は全くできない、自分と言う存在そのものが災いである、もう燃える火で消えてなくなるべきであると思うはずです。それがイエス様の意図でした、イエス様が言われたいのは、「だから、わたしを信じるのだ。」ということです。「このわたしが、律法の完成なのだ。このわたしを受け入れなさい。わたしこそが、永遠の命である。」と言われているのです。天の御国への入り口は、心の貧しき者、すなわち自分には何もよいものがない、全く駄目だ、もう終わりだ、聖なる律法の前で私は燃える火で吹き飛ばされる、というそういう人が、「わたしは、あなたを聖なる者とする。」と宣言し、天の御国の市民にしてくださいます。

信じるだけで救われる、という言葉は確かに真理です。しかし、「そうですか、信じるだけでいいんですね。」と言って、確かに口では信じるというかもしれません。けれども、信じるというのは、このようなイエス様の出会いがないと、結局、自分の行ないで生きようとなります。自分ではなくキリストが私の正しさなのだというところに立っていない人は、自分のどこかを正しいとするのです。

人がどれだけ正しいように生きようとしても、神の基準には達しません。金持ちの青年のことを思い出して下さい。彼は十戒の後半部分、親を敬い、姦淫をせず、盗まず、殺さず、偽らず、貪ることをしませんでした。ところが、「あなたの財産全部を貧しい人に施して、わたしに付いてきなさい。」とイエス様が言われました。彼は悲しい顔で去っていました。そしてイエス様は、「金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しい。」と言われたのです。そしてイザヤ書には、「私たちの義は不潔な着物のようです。(64:6)」とあります。これはまさに、「行きどまり」の世界です。正しい道を歩もうとしても、そこで「通行止め」の標識が置かれてそれ以上、進むことができない状態になっています。

だから、イエス様は十字架に付けられました。主はゲッセマネの園で、「できますならば、この杯をわたしから過ぎ去させてください。(マタイ 26:39)」と祈られました。何をもって「できますならば」なのでしょうか？もし、私たちが自分にある何らかの正しさで、救われるのであれば、この杯を過ぎ去させてくださいという祈りです。私たちの頑張りで、私たちのやる気で、私たちの性格の良さで何とかできるのであれば、イエス様は十字架に付けられる必要はありませんでした。しかし、他には何もなかったので、十字架に付けられたのです。十字架を信じるということは、自分側にある可能性をすべて否定することに他なりません。

ですから、イエス様の十字架を信じるということは、とても狭い道です。イエス様は、こう言われました。「マタイ 7:13-14 狹い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」私たちはどうしても、自分に可能性を見つけて、それをも許容してくれる道を見つけようとしています。「イエス・キリストだけなのですよ。」ということだけでなく、他にも付け足してやっていくことのできる道を探そうとしています。なるべく、道を広くしてほしいのです。しかし、それは滅びに至る道であるとイエス様は教えます。

3A イエスを信じる道

ですから、イエス様を信じて、受け入れるということが、命に至る道です。イエス様に群衆が、「私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」と尋ねた時、主は、「あなたがたが、神から遣わされた者を信じること、これが神のわざです。(ヨハネ 6:29)」と言われました。イエスご自身が道です。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはできません。(ヨハネ 14:6)」そして、興味深いことに、初代教会の人々は、「クリスチヤン」と呼ばれることがありますが、多くは「この道」と呼ばれていました。例えば、使徒 9 章 2 節です。「ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」この道という名で知られていました。(その他、19:9, 19:23, 22:4, 24:14, 24:22)

ですから、私たちは、自分が正しいと思っている道を進むのではなく、主イエス・キリストご自身を目標とする生き方をしているかどうか、確かめる必要があります。道を進んでいる使徒パウロは、そのことを、あの有名な聖句で述べています。「ピリピ 3:13-14 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して一心に走っているのです。」主イエス様が、私たち教会のために戻ってきてくださって、私たちが天において主に会う時に、主が私に、「良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実であったから、大きなものを任せよう。」と言われること、これが終着点になっているかどうかであります。

私たちはこのような競走をしているのですが、いかがでしょうか、競走をする時に私たちは最高のコンディションでいたいわけです。その競走を全うできるように、妨げになるようなものはなるべく避けたいと願います。この前は教会の人々と、競走ではないですが、尾瀬でハイキングをしました。尾瀬の気候や温度が分からず、かなり厚着を準備していましたが、実際は長袖のシャツ一枚でほとんど一日を過ごすことができたほど、暖かかったです。ですから、直前で脱ぎました。ベスト・コンディションで臨みたいわけです。

そこで、パウロも次のようなことを話しました。「1コリント 6:12 すべてのことが私には許されたこ

とです。しかし、すべてが益になるわけではありません。」ここでの「益」というのは、競走において益になるわけではない、というニュアンスがあります。つまり、自分の行なっていることで、特段に悪いものではないことはたくさんあります。けれども、イエス様をお会いする時まで、その競走をしている時に、自分に負担になつたり、妨げになるようなものがあれば、それは取り除きたいですね。「これは、罪であるかどうか、やっていいことなのかどうか。」という基準はもちろんのこと、それ以上に、「これをしていることは、信仰の競走に役に立っていることなのかどうか、それとも妨げになつてはいないか？」ということを知る必要があります。

私たちは、何か自分で動いているけれども、いつもどこかに戻ってくることはないでしょうか？「あれっ？ また同じ問題にぶち当たっている。」いろいろ動いているのに、どこに行っても同じ問題があります。それを主の前に持っていて、祈って、取り除いていただきましょう。信仰の競走に、その道筋に邪魔になっているかもしれないからです。

そして、私たちが今、自分が正しいと思ってしていることが、果たして信仰から来ているものなのかどうか、確かめてください。「2 コリント 13:5 あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。」ここでこういうことを言っているのは、コリントにある教会で問題について悔い改めた人がいる一方で、一部は未だに、「争い、ねたみ、憤り、党派心、そしり、陰口、高ぶり、騒動がある(11:20)」ためでした。正しいと思っている時に、本当にそれが信仰によるものなのか、自分が信仰から外れて、遠くに行ってしまっているのではないか、確かめる必要があります。もう一度、最初に引用した御言葉を引用します。「4:26 あなたの足の道筋に心を配り、あなたのすべての道を堅く定めよ。」